

表題	いぐさ本田における初期雑草防除法	機関	農業研究センター い業研究所
概要	除草剤ピラゾキシフェン・プレチラクロール・シメトリン粒剤は、本田植付後 13 ~ 15 日の 1kg/10a 処理で、 <u>発生前</u> の冬生一年生雑草全般に対して極めて高い効果を示し、薬害の問題もなかった。		

研究のねらい

近年、いぐさ栽培では、植付の早進化、早期落水管理、暖冬傾向などにより冬生雑草の発生が早まり、除草剤の散布適期を逸することが多くなっている。

特に、経営規模の大きい農家では、植付が長期間に及ぶことから除草剤の散布作業と植付作業とが競合し、この傾向が著しい。

このため、防除適期の幅の広い、安定した効果の得られる除草剤が望まれている。また、散布労力の低減も省力化を進める上で重要である。

そこで、本田春期の雑草発生前～始期処理剤として有効であったピラゾキシフェン・プレチラクロール・シメトリン粒剤（ワンオール S1 キロ粒剤）の有効性を検討し、本田植付直後処理剤による雑草防除法を確立する。

研究の成果

1. 除草効果

- (1) 本田植付後 13 ~ 15 日の 1kg / 10a 処理で、発生前の冬生一年生雑草全般（スズメノテッポウ、ガラシ、オオアブノメなど）に対して極めて高い効果であった。
- (2) 既存のいぐさ適用除草剤ビフェノックスと比べて、効果の持続性も高い。

2 薬害

- (1) 処理量が多いと生育抑制の恐れがあるが、処理量 1kg/10a で実用上の問題はない。
- (2) いぐさの活着前処理は薬害の恐れがあるので、十分に活着した後に使用する。

3 作業性

従来の剤の使用量 3 ~ 4kg/10a に比べて、本剤の使用量は 1kg/10a と少なくて済み、作業労力が軽減できる。

普及上の留意点

1. 従来のいぐさ適用除草剤に比べて使用量が 1kg/10a と少ないので、過剰散布に注意し、均一に散布する。
2. 本剤のみでは生育後半の除草効果が十分でないので、他のいぐさ適用除草剤を後処理剤として体系処理する。
3. 生育抑制などの薬害の恐れがあるので、砂質土壌や漏水田、排水不良で土壌還元が進んだ圃場での使用は避ける。

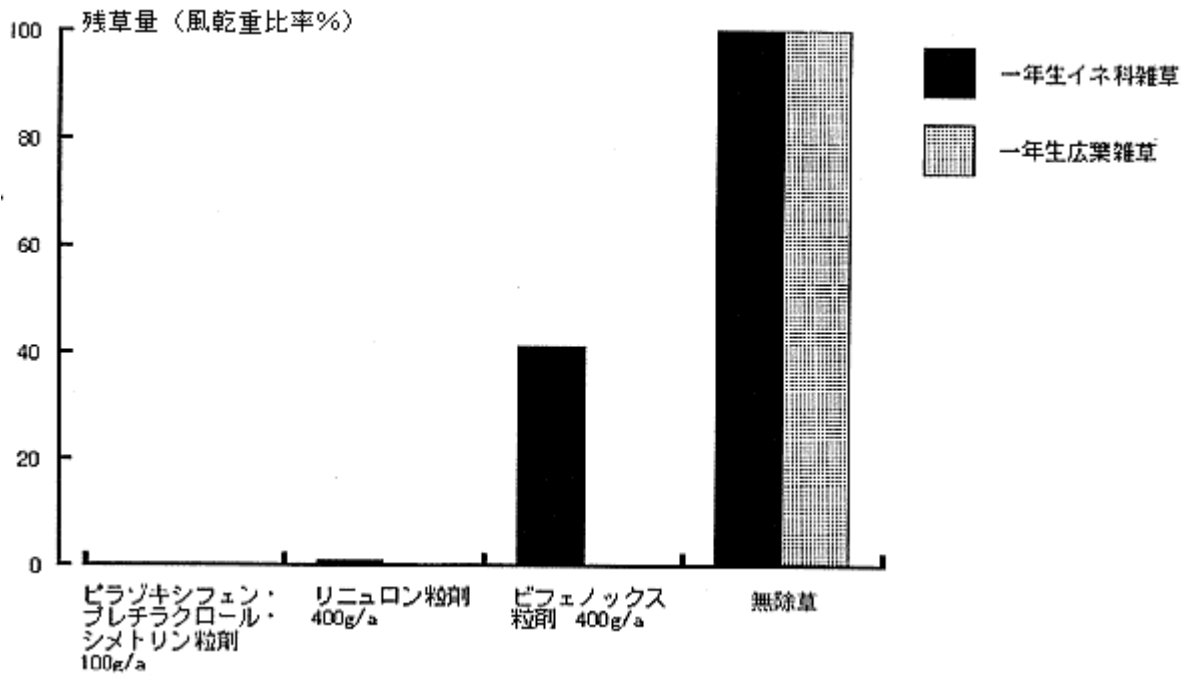


図1 いぐさ本田植付後13日(雑草発生前)処理における
ピラゾキシフェン・プレチラクロール・シメトリン粒剤の除草効果(1995年)
処理日: 1995年12月7日

表1 熊本県い草除草剤使用基準

表1 熊本県いぐさ除草剤使用基準

	散布時期		薬剤名	散布量 (10a当たり)
	早刈	普通刈		
植付・活着後			モーダウン粒剤 ロロックス粒剤 ワンオールS1キロ粒剤	3~4kg 3~4kg 1kg
第1回	2月上旬 }	2月下旬 }	カソロン粒剤2.5 カソロン粒剤1.0 カソロン水和剤 モーダウン粒剤	3~4kg 6kg 200~250g 3~4kg
	2月上旬~3月上旬		クレバー粒剤	3kg
第2回	3月下旬 }	4月上旬 }	モーダウン粒剤 カソロン粒剤2.5 カソロン水和剤 ワンオールS1キロ粒剤	3~4kg 3~4kg 200~250g 1kg
	4月上旬	4月中旬		
第3回	4月上旬 }	4月上旬 }	ナブ乳剤 ワンサイド乳剤	150~250ml 100~200ml
	5月下旬	6月上旬		

植付・活着後処理は、例年雑草の発生の早い圃場やオオアブノメ、タガラン等難防除雑草の多い圃場で使用する。